

イギリス カントリーファニチャー「ウインザーチェア」の 形態分析研究 そのⅣ（‘ゴールドスミス’チェア）

An Analytic Study of The English WINDSOR CHAIR Styles IV
(A Comb-back Windsor ‘Goldsmith’ Chair)

デザイン学科

山 永 耕 平

Kohei YAMANAGA

ABSTRACT

About 4 years ago, I made a bow-back Windsor chair and wrote its making process in this report II, and I was able to learn, the English Windsor is a chair in which its styles were embodying the sturdy simplicity.

After that I researched the historic styles of the English Windsor chairs, and I found one of chairs which has unique style. So called ‘Goldsmith’ chair.

Thomas Crispin is describing its origin as follows to his book. The ‘Goldsmith’ Windsor comb-back armchair is so named because it was once owned by the famous Irish writer and poet, Oliver Goldsmith (1728-74). This beautifully designed Windsor armchair, with its circular, dished and saddled seat, and its well-turned legs and stretchers, is painted a very dark green, almost black.

3 years ago, when I visited Victoria & Albert Museum. I was able to look closely at the chair and observed its constructional details. After that year, I wrote its drawings and made a model (scale 1/5), which I used it for teaching materials in my class.

In this summer I could create the Goldsmith chair with my student.

はじめに

本研究そのⅡにおいてウインザーチェアの典型的な形態としてのハイ・ボウバック・アームチェアを選んで、その制作課程をレポートした。その過程で長い時間をかけて形成されてきたウインザーチェアの魅力なるものに幾分たりとも触れることができた。その後、その根底をなす形態美のルーツとして17、18世紀の形態に目を向け、いくつかのタイプをあげて調べていくうちに欠くことのできない一つの椅子があることに気付いた。それがゴールドスミスチェアである。

前項（そのⅢ）は海外研修の機会を得て、ウインザーチェアの本場イギリスのハイ・ウイカム

を訪れて、実際の製作現場に立ち会い、ステewart・リンフォード社において、スピンドル・ボウ・バックアームチェアの製作プロセスを現場からのレポートとしてまとめることができた。そのおりに、次のテーマに考えていたゴールドスミスチェアについて、ヴィクトリア&アルバートミュージアムを訪れ、実測する機会を得ることができた。昨年デザイン研究の授業において、その実測値と図版及び写真を参考にして1/5スケールの図面を描き模型を制作させ、その検討の結果、脚の太さと座面の形態に一部変更を加えたものを本年の授業で再度とりあげた。今回の報告は夏期間を利用して本年度研究生の一人と共に実物の制作に取り組んだプロセスをまとめたものである。



図1 ゴールドスミスチェアー
The English WINDSOR CHAIR p19

1. ゴールドスミスチェアーについて

今回のテーマであるウインザーチェアーが‘ゴールドスミスチェアー’と呼ばれるのは、トーマス・クリスピン著の英国ウインザーチェアー (The English WINDSOR CHAIR) によると有名なイギリスの詩人で作家であったオリバー・ゴールドスミス (1728-74) が所有していたことによる。彼が死亡した1774年、その友人だったウィリアム・ホーズ (William Hawes) 氏に遺贈された。1世紀近くたって、その子孫にあたるサー・ベンジャミン・ホーズ (Benjamin Hawes 1797-1862) が死亡した10年後、その未亡人によってヴィクト



写真1 ヴィクトリア&アルバートミュージアム
に於けるゴールドスミスチェアー

リア&アルバートミュージアムに寄贈されたものである。それ以来、ヴィクトリア&アルバートミュージアムに保存され、現在唯一残る当時の形態の椅子である。彼は“この美しくデザインされたウインザー・アームチェアーは円形の座面を持ち、サドル形に挟られた座と、ロクロでうまく削られた脚と貫など、そのほとんどが黒に近いグリーンに塗られている。”と表現している。(図1) (写真1)

初期のウインザーチェアーはアームボウを突き抜け、座から延びるスティックの上部にかぶさるデコラティブな笠木からなる形態がコムに似ていることからコム (串)・バックと呼ばれた。それには2つのタイプがあり、スティックが垂直に並行に伸び、その上にクレスティングレールがかぶさるスティック・バックとファン・バックと呼ばれるシートからスティックがアーム・ボウを貫い

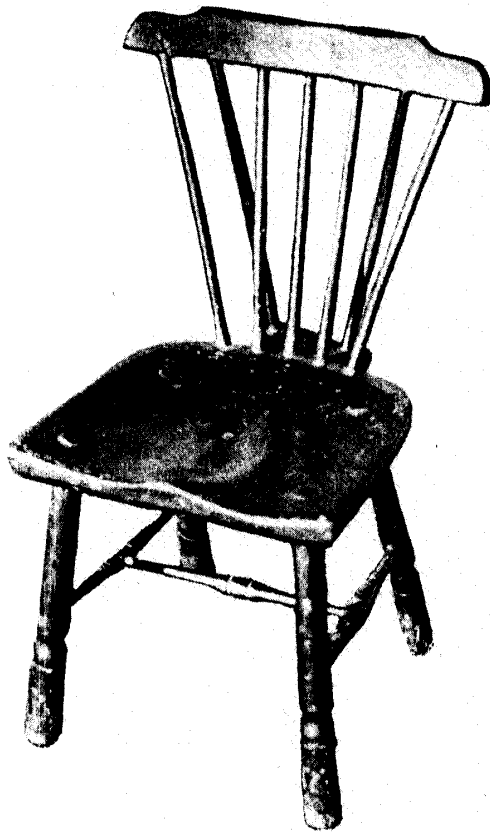


図2 18世紀後半 ファン・バックチェアー
The English WINDSOR CHAIR p20

て笠木の方へ広がる扇形をしたものがある。(図2) ゴールドスミスチェアは後者のファン・バック形に似たタイプである。

このゴールドスミス、コム・バックアームチェアをよく眺めてみると、その丸くお皿形のサドル形シートの後部は背を支える2本のスティックを差し込むためのいわゆるボブ・テールと呼ばれる部分に広がって延びている。シートの丸い形にそって扇型に上に伸びたスティックは笠木に達し、しっかりと後ろを支える構造になっている。アーム・ボウは3つの部分にカットされ、それぞれ湾曲した形に加工されたあと、相欠き継ぎ(lap-joint)によって組立られている。その両先端はアームサポートによって支えられている。

2. ゴールドスミスチェアの図面

3面図 1/5縮尺(図3)

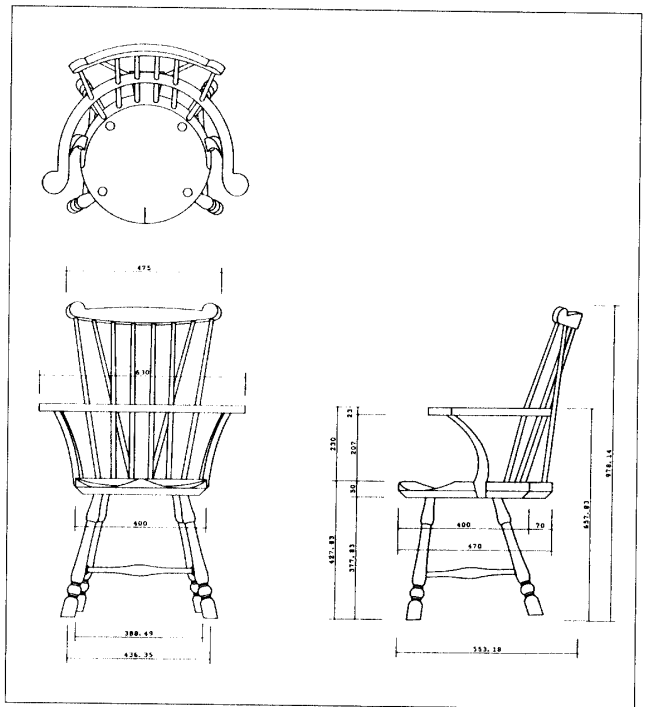


図3 3面図

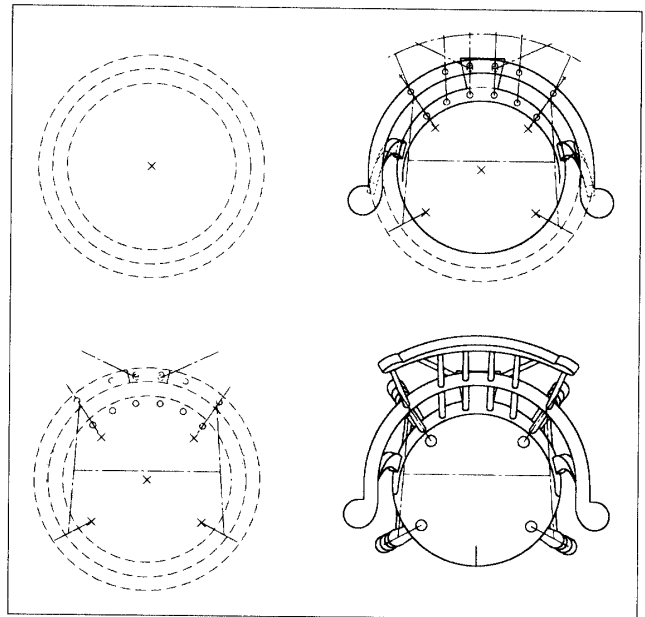


図4 同心円による作図順序

3面図を描くにあたって、まず平面図を描くうちにシートとアームが同心円で描けるのではないかと仮説をたて、それを側面図の背の角度と照合して見るとアームの位置、背の角度などみごとに実測値と一致した。(図4)

CADによる確実な寸法の入力により、軸線図

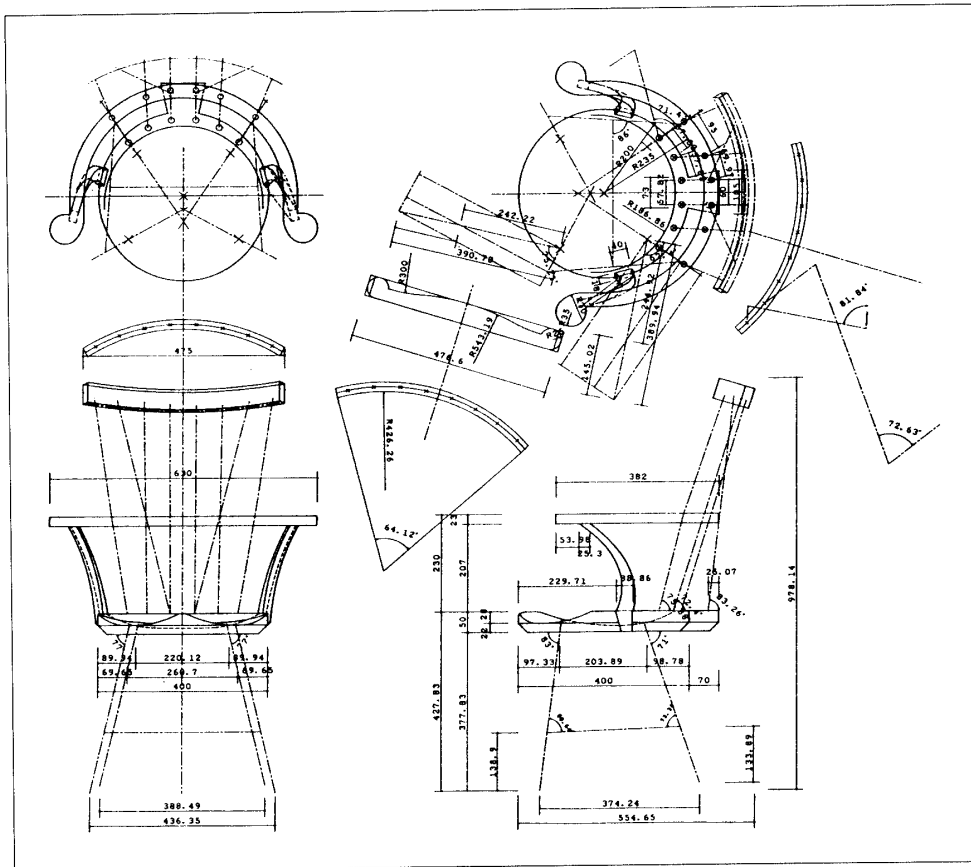


図5 軸線図(制作図面)

1/5縮尺(図5)を描き
すべての実寸を割り出す。

部品図 1/5縮尺(図
6)

軸線図をもとに実寸
の部品を作成

現寸図 1/1原寸(図
7)

部品図1/5を1/1
に変換A0サイズにまと
める。

3. ゴールドスミス チェアーの制作

○座面(写真2-3)

材料:ブナ(beech)

本来、ウインザーチェア
アのシートは楡(ニレ,
elm)の一枚板である。
50センチ幅の楡を手
に
入れるのは大変難しい。
求めた楡は白たを入れて
45センチでわずかに足
りず、25センチにわ
いて接ぎ合わせるにはも
ったいない。ヴィクト
リア&アルバートミュ
ウジヤムの“ゴールド
スミス”チェアはおお
よそ真っ黒に分厚く塗
装がほどこされて、そ
の材を推測はできて
も特定するのは困難
であった。しかし幸い
スティーワート・リン
フォード社製の“ゴ
ールドスミスチェア
”の座は楡で、ア
ームやスティックは
一位(yew)であ
ったので、おそらく
それに間違いないと
推察できた

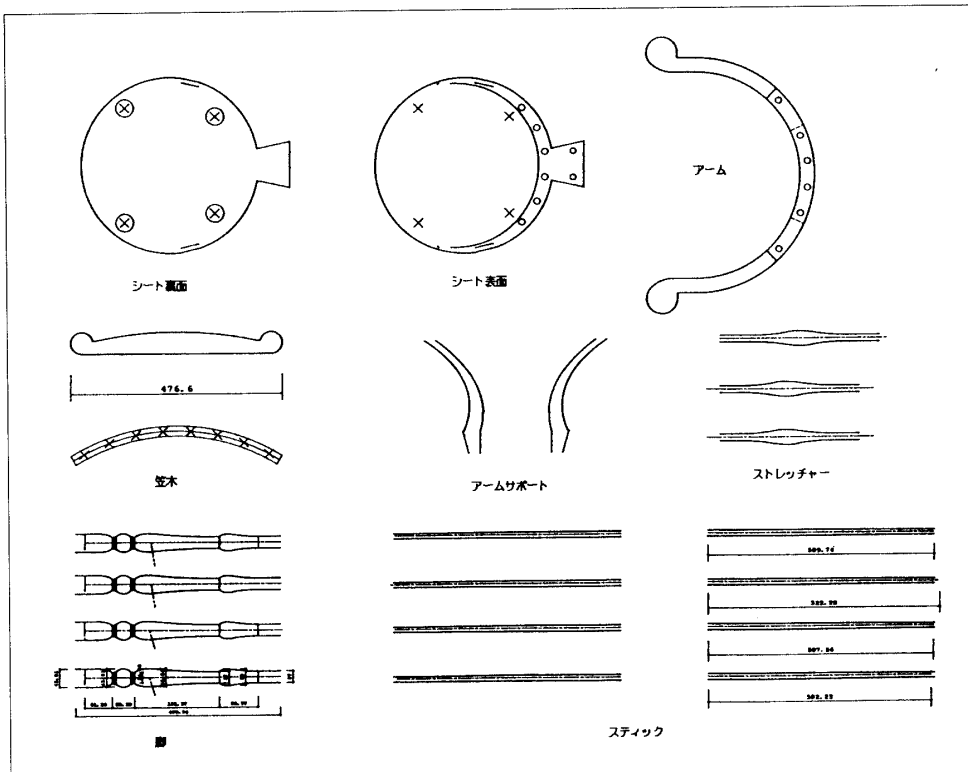


図6 部品図1(1/5)

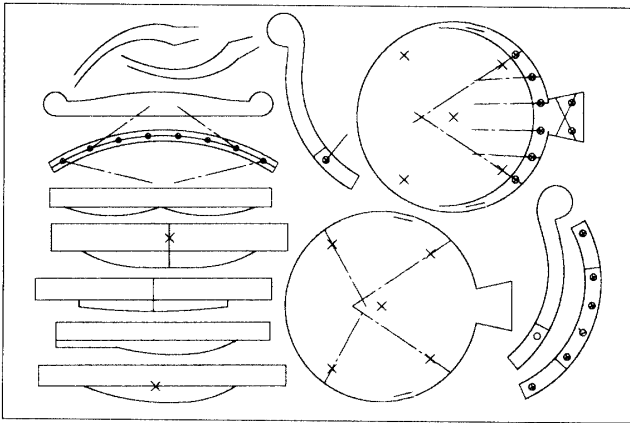


図7 部品図2 (1/1)

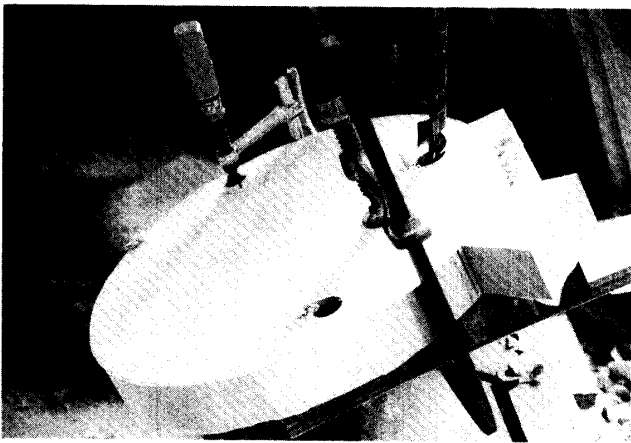


写真2 シート，脚の穴

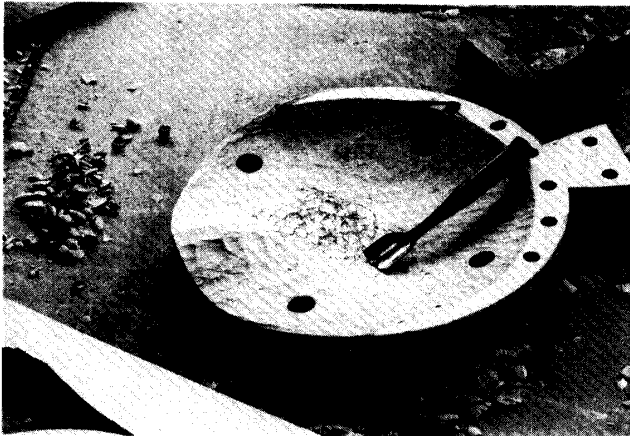


写真3 シート，座面彫り

が、それらの材料を手に入れるのは不可能であった。思案の末、当時もっともポピュラーな材であったブナの2枚矧ぎにせざるをえなかった。

ゴールドスミスチェアの特徴であるサドル型シートの形態を把握するには、今回もっとも時間と労力を要した仕事であった。なぜならば、サド

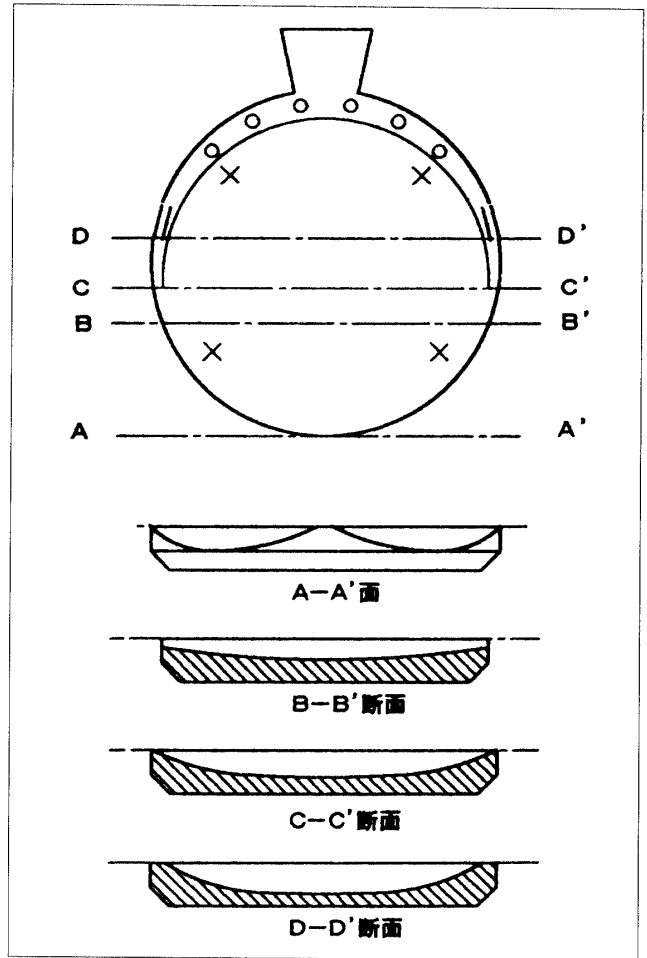


図8 シート断面 (正面)

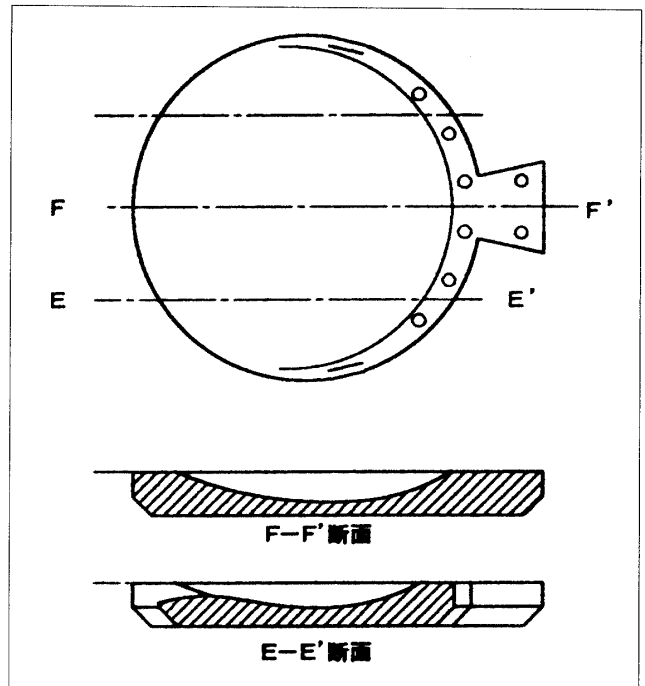


図9 シート断面 (側面)

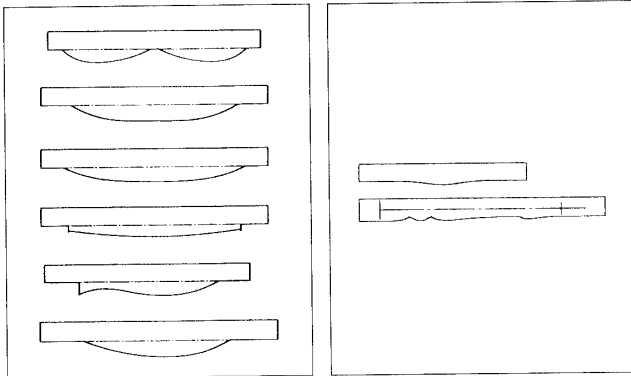


図10 シート座面定規

図11 NCによるナライ型

ル型の窪みは実測不可能であり、できたのは最も深い部分（35mm）であった。あとは写真による判定と経験にたよって図8と図9の断面図を作成し、それに基づいた定規（図10）を作り、2脚のうち1脚を定規にしたがって木槌と丸のみにて手彫りして、すわりこちを確認の上、より正確な定規を制作して2脚目を仕上げる方法をとった。現物と図版と、現場で撮ってきた写真とを見比べては修正を繰り返す連続で、最後まで完璧とは言えないまでも座った感触はなんとも言えないこちよさを再現できた。

○脚（写真4 - 5）

材料：ブナ（beech）

ゴールドスミスチェアーの脚の曲線は考えていたよりはるかに微妙なものであり、何度も図面の訂正を繰り返し、最後にはスケッチとCADを見比べる方法でなんとかおさまった。平成10年度の海外研修旅行引率のうちに学生数名を連れてハイウイカムを訪れスティワート・リンフォード社製のゴールドスミスチェアーを見ることができた。そこで実測した寸法が5ミリほど太いことがわかり、後に検討の結果平成10年度の図面を訂正せねばならなくなった。図面を訂正し、実際の制作のためにナライ旋盤のナライをNCルータにて作り、制作をはじめたのはようやく今夏のことであった。ナライ旋盤にて加工する方法を取ったが、あくまでそれは概略の形である。細部のリングの形は手バイトに頼るしかなく、最終の形がき

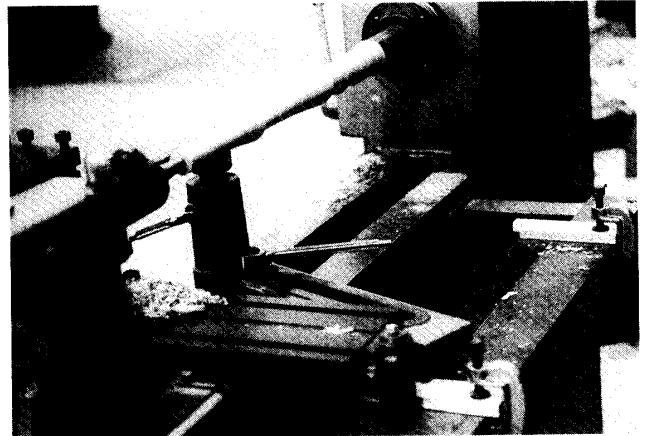


写真4 脚，ナライ旋盤

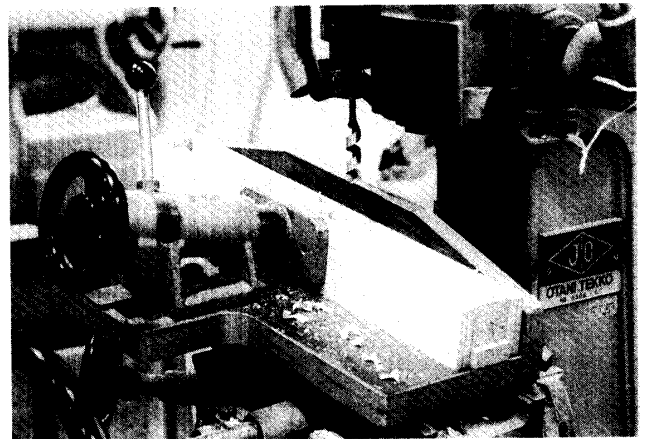


写真5 脚，貫（ストレッチャー）のホゾ穴

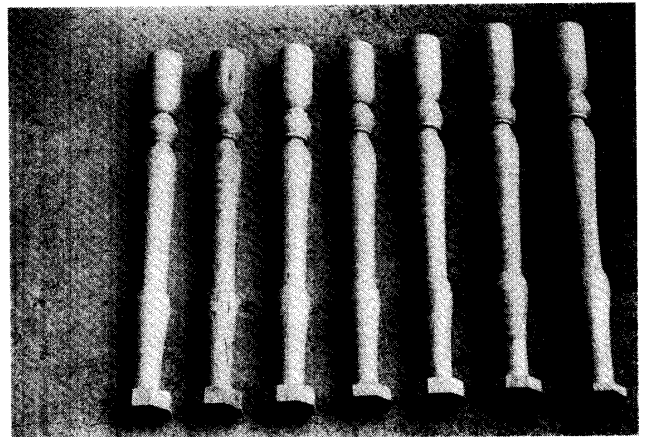


写真6 脚の試作品の列

まるまでには相当数の試作が必要であった。（写真6）

○アーム&アームサポート（写真7 - 8）

材料：ブナ（beech）

アームは3つの部品からなり、相欠き継ぎ

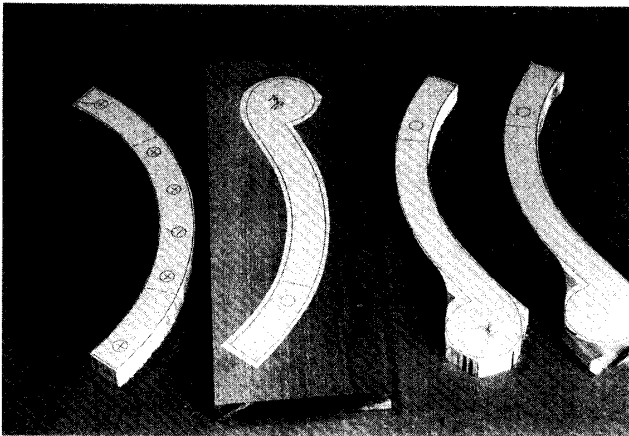


写真7 アーム部品

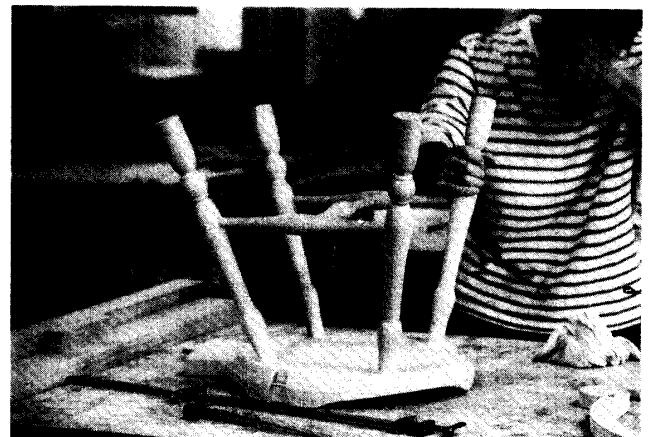


写真10 組立1 (下部)

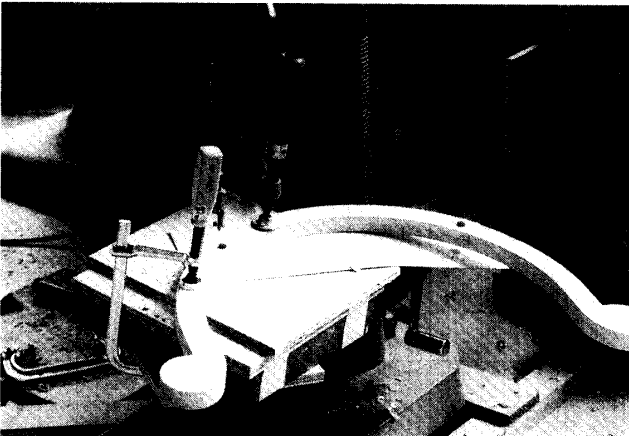


写真8 アーム, スティック穴

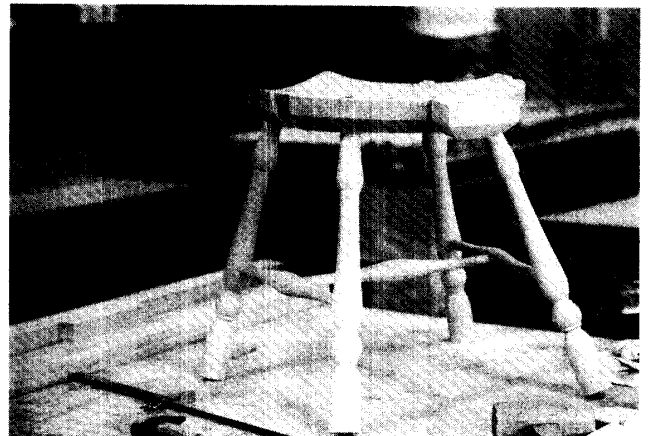


写真11 組立2

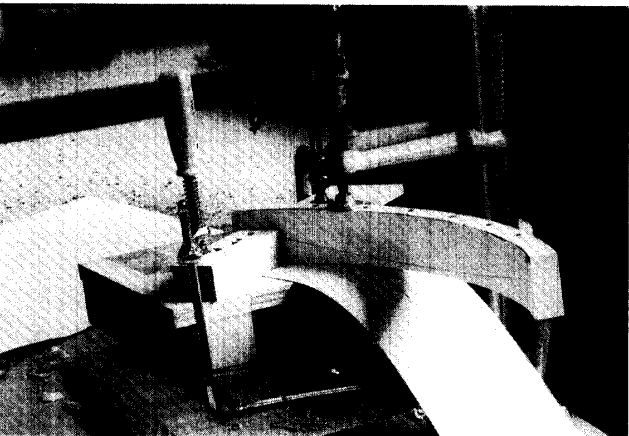


写真9 笠木 スティック穴



写真12 組立3 (上部)

(lap-joint) による接合とその部分へのスティックの穴あけは今回最も失敗の多い部分であり、現在も尚、その部分に関しては不安の残るところである。

この椅子のユニークな部分を代表するところであった。

組立 (写真10 - 12)

○クレスティングレール (写真9)

材料：ブナ (beech)



写真13 完成（正面）

4. ゴールドスミスチェアの完成（写真13 - 15）

ゴールドスミスチェアの形態はウインザーチェアのなかでもひとときユニークな形をしているが、よく見るとのちの形態に移行するウインザーチェアの原理的な面をほとんどかなえていることに気がつく。そこからなんらかの法則性を導き出そうとした結果、平面図を同心円でまとめることができたが、これが正しいかどうかは実際の図面が存在しないゆえに判断が難しい。しかしそれに基づいてゴールドスミスチェアが完成したのは事実である。職人の経験と確かな技術の積み重ねの中から生まれてきたウインザーチェアのルーツを目の当たりにしてその感激はひとしおであった。

おわりに

1995年度海外研修のうちにヴィクトリア&ア



写真14 完成（側面）

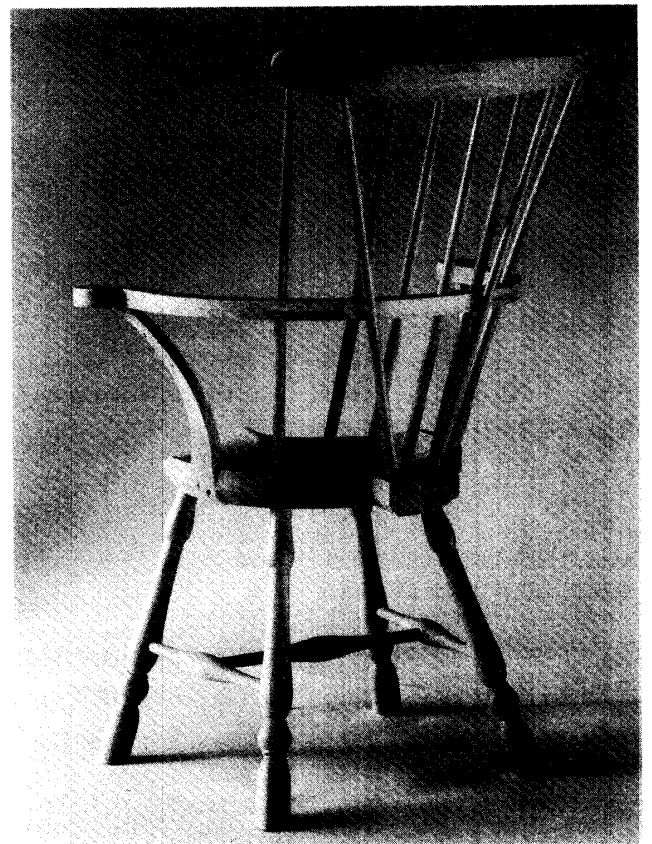


写真15 完成（後面）

ルバートミュウジヤムにおいてケート・マクルスキー (Kate McCluskey) 女史の立ち会いのもとで実測する機会を得ることができた。しかし実測以外、椅子に触れることはできず、ましてや座ることもできないものであった。ゴールドスミスチェアが寄贈された1870年代当時の文書がそのままの状態で保管されているのはさすがV & Aの思いであった。

制作にあたって、研究生富永哲君の前期の課題として取り組んでもらった。方法は2脚分の材料を揃え、1脚を試作品として加工方法などを指導しながら制作、その経験をいかして他の1脚を完璧に完成させる方法をとった。制作指導する側と作者の二人三脚によるものである。またデザイン学科木工房の塩川安之氏には模型の制作見本などをお手伝いいただいた。

参考文献

THOMAS CRISPIN, *The English WINDSOR CHAIR*, (Alan Sutton Publishing, 1992)

山永耕平, 九州産業大学芸術学部研究報告 第26, 27, 29巻, イギリス カントリー・ファニチャー「ウインザーチェア」の形態分析研究 そのI, II, III, (九州産業大学芸術学会, 1995, 1996, 1998,)